

ミシェル・ファイファー扮する女弁護士の振り見て我が振り直せてことよね、最後は彼女もいいママだったわ、ローラが演じた里親も見習わなくっちゃ、ルーシーはたくさんの母親の愛に守られてるの、アニーも忘れちゃダメね、彼女があの子にしてあげたように、あなたが彼女のような可哀想な子どもにならないように、自分も努力するから。

——みたくアットホームでハートフルなコメントをわが姉御殿の感性に微塵ほども期待したつもりは、ない。

まったく言っていないほど、ない。

むしろもう一人の方が、ダコタ・フアニングちゃん扮する“あの子”の活躍に影響を受けてくれればいいと思っていた。触発されて何らかのアクションを起こしてくれば御の字。具体的にはハグか、あるいはお姉ちゃんのベッドに生抱きま^{なま}くらくら出張サービスなんてどうか。

そんなあたしの期待半分はしかし見事にそっちのけされた。そしてもう半分の懸念どおり、どうかほぼ案の定、よくよく考えてみれば何の不思議もないことに、よるたんはスクリーンの中で同年代のよい子のかがみみたいにキラキラ輝くルーシ

ー・ダイヤモンド・ドーソンちゃんを目の当たりにしても、終始ノーリアクション、ノーティア、ノークライ、ノースマイルのままフィニッシュだった。エンドロールが終わる前も後も椅子の上で新種のクッションみたいにほけーとしたままだったし。上映中に船をこぎはじめるとはなかったので俳優かたなしとまでは言いづらいが、あたしの方の立場はない。

かくして、オペレーション・ジェシー・ネルソンもまた失敗に終わったのである。デデーン。

——いいかげんにしてもらいたいですけど？

これまで数々の仲よし作戦を叔母にして妹にして花の高校二年生であるこの銀ちゃんめが単独で考案し能動的かつ積極的に時間と労力を惜しみなく投じて投じて投じて投じて投じてきたというのに、肝心のお二人さんはそろってマイペースで根っからの寡黙ちゃんてぶきつちよもここに極まれりという面も多分にあつて、いつまでも全然打ちとける気配が感じられない。お互いに関わり合うことをしようとしなない彼女たちは、消極的にすらかみ合わない。どちらにも干渉を避けている様子はないのだけれど、こちらから続々提供しているはずのコミュニケーションのとっかかりはことごとく空振りしてるといっていいか、バッテリーボックスに人の立つ気配からまずない気がするのはなんつーことよこれ？

家はさして大きくない。お姉ちゃんが仕事へ出かけてさえいなければ、お二人は一つ屋根の下でほぼいっしょにいる。だっちゅーのにも何も進展しないし改善もされないっていうのは絶対にどこか間違ってる。歪んでる。

もつと楽しそうにしなさいよ。幸せそうにしなさいよ。

甘え甘えさせていちゃいちゃしまくって、あたしはお邪魔ですかる、いなくなった方がいいですから、みたいな空気を読む立場にさせなさいって。

今のままでとひたすら心配になって他に身動きが取れない。ずっと見てあげなくちゃいけない気分になってきて、家から出ていけない。あわよくば戸籍から出ていきたいのに。行き先の候補はまだありませんけど。

不安はあたしをかき立てる。特にお嫁に行けない不安となると切実もいとこだ。ヴァージンロードで後ろからスカートを踏まれないことを祈り、せつせと石を用意する。投げてぶつけるものを用意する。獲物は水面に思うていた時期もあつたけれど実は思いのほか深くにいた。けれど工夫をすれば水面までおびき寄せることも可能なはずなのだ。あの手この手、どの手？ わからないので試行錯誤の毎日である。作戦を練つては一石を投じる。ボール、ボール、またボール。ピッチャー交代はなし。打たれるまでなし。だからはよ打たんかあああああ

い。あたしや前時代の武器じゃなくてブーケが投げたいんじゃない。あああああ。

すでに新しい作戦の仕込みは終えていた。今日はその実行日に当たる。晴天には恵まれませんでしたが乾燥した曇り空の下、地元商店街の入り口に来ております。あたし銀ちゃんです。どうぞ。

「どうぞ、じゃない。その作戦とやらへ僕を組み込む流れかこれは？ 連れてこられた僕は手綱を引かれていることによく気づいたロバの気分だが？」

「おおっと幼馴染の守雛少年^{マヒナ}、のっけから仏頂面ゼンカイですね。素がアンニユイ眼鏡ボーイのチミが黒々としたオーラを発しているとなナカイも寄りつかないよ？ あたしみたいな物好き以外みんな逃げちゃうよ？ お嫁さんの候補、あたししかいなくなっちゃうぞ。ぞ？」

「っーわけで今日は新婚の予習です。キヤツ」

「離婚してください」

「やっだー、あたしたちまだ始まってもないのに」

「帰りたいんだけど」

「愛の巣へ？」

「僕の逆鱗はどう？」

「離れたくないの」

「よっぽど触り心地がいいんだね」

わはー、ひなつちが笑ってるう、すんげえいい笑顔、まぶしッ。震えが止まらなくなるほどまぶしッ。漏れそッ。やー久々にいいもん見れたねえ。

「生誕祭の準備を抜けてきたんだ。父さんや教会管理の方々はもうほとんど仕事は残ってないから心配しなくていいと言ってくれたけれど、そういう厚意で無下にしてくれないよね？ それに聖夜は家族と過ごすのが恒例なんだ。母さんが一人で晩餐の用意をしている。僕も手伝いに行きたいんだけどね、行きたいんだけどね、行きたいんだけどね、ぜひ行きたいんだけどね」

「ご、ご、ご、ごめんなさいごめんなさい！ いいかげんにしますいいかげんにしますからそのシャイニングエンゼルスマイルで迫ってこないでええええええ！」

「じゃ、僕は帰る」

「ニコッ」

「おろしました。ありがとうございます」

ああ、しかしここでひなつちに帰られるとあたしのビューティフルな作戦に支障が、出るか出ないかって言われたら出たとき困るんだけどなあ。よし。

「ひ、ひな！」

「まを抜くな。二度とだ」

「ひやい。しゅみましえん」

怖いよ、ま必須のひなつち。じゃなくて、

「好きです！ 結婚してください！」

「無茶だ」

「今日一日だけ！ って、うわー、無茶って何よ？ ホモセクシャルの性別の壁より厚いへだたりがあたしたちの間にはあるっていうの？ 人はそれを愛と呼ぶ」

「お前は何がしたいんだ？」

「うーん、出産？」

「浜辺へ行け。事を終えたら涙とともに海へ去れ」

「それは産卵だよ、まひなんのえっち」

「今のどこに卑猥な部分があったのが僕には全然わからない」

「ゲッ、これだから敬虔な○トリックは」

「伏せ字にしても僕を敵に回したことはない」

「パトリックだよ？」

「そのボケは苦しい」

「むむむ、なかなか手ごわいぜよ。気に入ったっちゃ。おまんをわしの日カレシに任命しちやるきに、コーエーに思うがええわ。ナツハツハツ」

「はあ、用件はそれか」

わーお、さすがひなっち、話が早い。

「そゆことです。ま、あくまで見つかったときだけでいいからさ、カレシです。ま、銀ちゃんとの蜜月タイムにおやまあ偶然です。ね奇遇です。ね、ちよっと僕の戸籍上の姉になってくれませんか、みたいなノリで話合わせてください、お願いします」

「誰に見つかるんだ？」

「お姉ちゃん」

「衛幸さん？」

ひなっちに怪訝な顔をさせたところでジャストタイムインツ、地下駐車場から出てきたサングラスの女性にご注目。蜂蜜色のゆるうくカールしたロングヘアを、今日も彼女は襟足で無造作にまとめております。白いリボンが、うーわー似合ってます。何あれ、パンツルックに仕用のコートって、ちよっとやめてよもう御歳二十二歳が。ひと目見て誰かわかるわ。少しでもおしやれする気が起こったんならもうちよっとがんばってくださいよ、せめて方向性くらい絞ってまとめてきなさいよ。スレンダーだからパンツ似合うけど、だからむしろリボンが下手に浮いてるんだっつ。つうかでええよ！どこで売ってたのそのふんどし!!

「何をわなわなしている？ あれ？ 衛幸さんじゃないか？」

「見ないでえ、身内の恥を見ないでええ！」

「あの人が恥ならお前は死刑囚か何かか？」

「にやっにやっにやにおう!! てんめ、ジョークでも言っていないことと悪いことがあるぞオ！」

「とある同年齢の異性から度々冗談で済まないレベルの恥辱を受けているんだが」

「今日はけっこう気合い入ってる方なんだぞ！ 寒いのがマンしてがんばってんだぞコラア！ パンツ見るか!!」

「ここからだど丸見えだぞ」

「ふぎやあああスカート反乱んん!!」

「見つかるはずじゃないのか？」

「まずいよ、まずいよそりやあ、タイル張りの街並みで小さな春が満々開ですよ、冬の装いにしちやエキセントリックすぎるよ。あたしつてば自宅からスカートはき忘れて……え、来て、ない？」

「何をおろおろしてる？」

「ど、透視!!」

「できるか」

「あたしの春が丸ハダカだっつたじゃん！」

「言っつない。ひとことも言っつない」

「つばみのまま大事に取っつあるんだかね、ちゃんと！」

「何の話だ？」

「カトリックなら崇拜なさいよ!!」

「伏字も失敗して意味不明なことばかり言ってる暇があったら衛幸さんをどうするのか言え」

「だーめだコイツ、このタイミングではかの女の話とかマジありえないんですけどオ、いい度胸しすぎなんですけどオ。よりにもよって衛幸さんときたよ。なんで今お姉ちゃんの話なんか、ってギヤーオ! 丸見えじゃん! チカチュー入り口に立ってるお姉ちゃんからこっち丸見えのモロ見えじゃん! やっべ、急いで隠れろっ。隠れ、ってどこに? あ、交番がある。やあやあ、おまわりさん、怪しいものじゃないんすよ? ストリーキングが趣味の善良な一市民でえーす。手前の植え込み使わせてねー。ほらっ、ひなっちも早くここへっ。ハアイド、ハアアアアイド!

「まを抜いたな?」

「ぎゃーっ、今のノーカン! ノーカン! 心の声だっつもの!」

「で、衛幸さんをストリーキングする目的は?」

「コ、コラアア、声でつけえぞっ。ここー応交番の前だからっ、

ただでさえあたしら挙動不審で注目浴びてるからっ」

「自覚があるなら自首を薦める」

「監獄でひと晩明かしちゃう? 看守にバレないよう二人は声を押し殺し——」

「お巡りさん、こっちです」

「うそうそうそ! スカートは家から履いてきました! 痴女じゃありません」元談抜きで巡査さんの視線が痛いからね? これ以上遊ぶつもりなら僕は他人のふりをして帰るよ?」

「ひいッ!」

街中のせいかもしれませんが今日は取り乱すことも少なくエンゼルスマイルが大繁盛ですね、守雛クン。先生はあなたの成長を誇らしく思います。えー、はい、あと二秒で腰が抜けて立ってなくなりそうなので、ちよっと真面目にやります。

「お姉ちゃんこっち見てる?」

「まだ見てない。顔を出しても大丈夫だろう」

「ほ、ホント? ていうかひに、あややややまひなくんはっ」

「ギリギリセーフだったな」

「おおおお隠れにならないのですかい?」

「バレないようにする理由をまだ説明してもらってない。まあ今気づかれても僕一人だと言いわけすれば済むが。この格好もクリスマスなら目立たないだろう」

目立たないだろうってキミ、キャソックではごさいませんか。いっつもそれ着てるからあたしは見慣れちゃってるけど、街中でそれは地味でも目立つよ? いくらクリスマスでも物珍しがられるよ。ブツチンがられますわよ? まあお姉ちゃんの目に

入りさえしなけりやいいんだけど。

「じ、じゃあじゃあじゃあ、お姉ちゃん、誰かと一緒にいる？」

「だからお前がどんな《誰か》を想定しているのかわからないって。というか自分で確かめればいいだろう？ 頭を出しても大丈夫と言ったはずだ」

「だ、だってえ……」ここでそんな意地悪ですか、守雛くん。未来のお嫁さんは悲しいはずぞ？

「……いないよ。衛幸さん一人だ」

「うそおっ!？」

あたしは慌てて植え込みのかげから立ちあがった。通りの向かいにある駐車場出入り口の前で、ふんどしリボンをうなじから垂らしたクールレディが火のついた煙草を煙と一緒に携帯灰皿へ封じ込めている。本当に一人だ。連れらしき人影がない。なんで？ ふつふつとした感情があたしの中で膨れあがってくる。

まさか、置いてきたの？ なんで、どうして――

「誰か待ってるみたいだな」

「ひえ？」

ひなつちにそう言われて呼吸が泳いだ。怒りを声に出しかけていたせいだ。あ、まずい、これしゃっくりが出る。

横隔膜からの警報をなんとなく察知しながら、地下駐車場出

入り口から別の人影が出てくるのを見つけた。黒髪ロングのタインীগール。パピーこいぬかスカンクくろいたちみたいだ。コーヒーブラウンのしましまポンチョはシルエツトがふくふくしてる。見覚えのある姿にすつと胸が落ち着いた。イエス、ノーしゃっくり。

あのポンチョの中身がガラス細工の小鳥みたいにとつても華奢なことをあたしは知ってる。ツーサイドアップ変形のお団子ダブルシニヨン二つは、白いレースのカバー付き。今朝のあたしの奮闘と努力の結晶は、遠目から見直してもなかなかの出来栄を誇っていた。素材がよかったからだ、彼女の髪感触を思い出しながら謙遜する。それでもあたしはあたしの仕事を自賛したいぜ。

「ああ、今日もベリイキューツだよ、よるたん。ヒツ！」

「あの子が夜祥ヨスガちゃんか」

そういやひなつち、生よるたんは初見でしたか。

「おーおーヒツ、早速見惚れてるねえ。どうだい守雛ヒツ、くん。可愛いだろー、ちっこいだろー、なでくりまわヒツ、まわしたいだろー、膝の上に乗せてヒツ、ギョツとしたいだろーヒツ、はっはっはっ。あたしのヒツ、自慢の姪つ子だかな。絶対にあーげないっ。代わりにあたしをあーげヒツ、ううううぜえ！ しゃっくりキャンセルマジうぜえ！」

「お前は正月に一人で双六をしていそうだ」

「やめて！ 的確に銀ちゃんの尊厳だけを扱らないで！」

扱ってもらえるだけでもうれしいだなんて、恥ずかしすぎて言えないもの。むしろもつと深くまで扱ってほしいのに。あたしはすでにおかしくなっちゃってる。もうひなつちなしじゃ生きてけない。

「あなたの手にかかるたび、心はキズモノになってくみたい……責任取ってくれなきゃ、あたし——」

「トイレに行つてただけみたいだな」

無視をされても一人。いや無視されて一人なのか。オーイェー、諦めませんよ、勝つまでは。

地下駐車場の出入り口には、エレベーターと階段のわきに公衆トイレもついている。よるたんはさつきそこから出てきた。近づいてきたよるたんにお姉ちゃんがハンカチを渡している。よるたんはそれを受け取つて、洗つた手を拭いているようだった。

「お前から聞いてたよりは仲よさそうに見えるが」

「そりゃ、お姉ちゃんも気を回す努力くらいはしてるよ。あたしにだってあれくらいしてくれるし」

「衛幸さんも苦労してるんだな」

「そこは《いい姉を持ったな》じゃないの!？」

「二人は何をしに街へ？」

「ナイス・クエスチョンだよ、ひな——」

「ま」

「うえい」

心の中ではずっとひなつちだからね、ウフフ。

「おとといお姉ちゃんにね、トリック・オア・クリスマスプレゼント！ つて突然言ったの」

「衛幸さんも苦労してるんだな」

「はい、二度もつつこみませんよー？ んで、情け深くも《何が欲しいの?》って訊き返してくれた姉上様に、わたくしはこう答えたのです。《自分で考えなさいよ!》」

「お前は情けない」

「こうも言ったよ。《わからないなら夜祥に訊いてみればいいじゃないか。イマドキのかわいくい女の子が何をもらおうと嬉しいか、お姉ちゃんよりはだいぶよくわかってると思うけど?》」

「お前と衛幸さんの方が歳近いんじゃないか？ 夜祥ちゃんと付き合ってたって、まだ半年も……」

「それはもうつつこまれ済み。オンナノコとオンナの間には越えられない壁があるのよオー、つて論破しといた」

「馬鹿らしくなって折れる衛幸さんが目に浮かんだ」

「という口実で、お姉ちゃんはやるたんのラブラブショప్పングを余儀なくされちゃったのです！」

「二人の商店街デートが本命。なるほどな」

ただデートさせるだけじゃあない。お姉ちゃんはあたしへのプレゼントを選ぶために、ああだこうだとよるたん相手に質問をしなくてはならない。イマドキの女の子はどういうものが好きか、妹の銀霞^{ギンカ}叔母^{オジカ}さんはどんなものが好きそうに見えるか、このくらいの質問は基本。だけどお姉ちゃんが積極的になれれば、あれはどうだ、こういうのを夜祥は可愛いと思うか、夜祥はどんなものが好きか、どういうものが趣味に合うか、夜祥ならどんなものがもらって嬉しいか、なんて具合によるたん自身のことへ踏み込んでいける。いこうと思えばこんこんいける。会話もはずんで趣味への理解も深まって一石二鳥。そして最後には、夜祥にも何か買ってやろう、みたいな話になればいいなあ、っていうか普通ならないわけがないよねえ、ならなかったら絶対に許さないからね、ただじゃおかないかんね、お姉ちゃん？

「又フフ、覚悟なさい」

「なるほど、デートを失敗させて二人の中を引き裂く魂胆か。さすがだな」

「うおお!? なんでやねん!?!」

「あくどい顔をしていた」

「してねえええよつ。よしんばしてても銀ちゃんくあわいいま

まだもんつ。よくって? あたしたちは二人のデートの成功を見届けに来たの。お姉ちゃんたちの距離が少しでもいいから縮まってほしいの。って、毎度毎度事後報告なら嫌というほど聞かせてやってんでしようがっ」

「自分で嫌と思うことを人にするなど教わらなかつたか?」

「教わりましたけど何か?」

「そう来るか」

腕組みをしたひなつちは鼻で軽く息をついて、お姉ちゃんたちの方を見やる。「デートの成功を見届ける、ね……」ひなつちの声は冬の風と風の隙間に細い糸みたくするりと入り込んだ。

「ここまでセツティングできたんなら、もう別に尾行までして監視する必要もないんじゃないか? あえて言うのも何だが、衛幸さんいまだにお前のたくらみというか、意図を察してないわけじゃないだろう。その上であの人なりにうまくやるんじゃない」
「おおつ、よるたんとお姉ちゃん移動し始めたつ。我々も続くぞまひなん! オペレーションII エイレイテュアの正念場は実はこつからだぜ!」

「おい、待て。監視以上の何をする気だお前は? とうかまひなんって何だ?」

「作戦にかこつけて、まひなんとデイツツツツ!」

「それは知ってる。あの二人の方に具体的に何をけしかけるつ

もりか訊いてるんだ」

「うわ、さつぷ。その受け身はさつぷいよまひなん。生かすにしても殺すにしてももつとハ・ゲ・シ・クしてくんなきゃ、こちとらでんで満足できないんですけどオ？」

「やはり僕は帰宅すべきのようだ」

「ああんつ、いけずウ。いちいちへソ曲げてんじやねーよう、ったく。大丈夫だったの。この銀ちゃんに任せておけば、万事お茶の子さいさい、チョチョイのパーのプーイよ」

「チョチョイで、バ、アにしそうだという僕の懸念はそういう種類の《大丈夫》を欲しがってはいないのですが、お嬢さん？」

「おおっと、こうしちやいらねえ、見失つちまう。ダツシュダツシュ」

かけ足。商店街は交番のそばの入り口から屋根アーケード付きになって、左右に伸びている。お姉ちゃんとするたんは屋根の下へ入ってすぐ右側へ入っていった。「ええいつ、走りながらでもいいから質問に答えろ！」フン、きみが律義に追っかけてきちやうことは織り込み済みだよ、ひなっち。

正直に告白すれば、彼についてきてもらう必要なんで実はない。呼び出したのは、本当に今日の作戦に関してだけ言えば、お姉ちゃんにあたしが見つかったときのための保険以外の何もでもなかつた。

彼に言ったことがそのまま丸ごと真実、余りはなし。

なんだかんだ口うるさいけど彼はいわゆるいい人で、具体的には基督教おうちの教えを使つてではあるけれど《誰かを救いたい》系の人だから、あたしが神妙に本当のことを話しても、見捨てたり無理やり諫めようとしたりはしないはずだ。と思う。

ただ、そういう善意にすがつてしまうとあたし自身がすごく弱気に見えそうだから、だとしたら格好がつかないから、煽つて煙に巻いて、彼に譲歩を強いている。こちらのつばい主導権。きつと《つばい》だけだけど、そういうみみっちい代物でも握れてないと不安でしようがないオクビヨウモノなので。

ねえ、あたし。どうしてそんな遠回りを自分に科してまで、保険の《カレシ》が欲しかつたわけ？

だって、お姉ちゃんたちは、せつかくの親子水入らずなんだよ？ 無粋でない手出し以外は、したくないじゃない。

★

衛幸。

あたしのお姉ちゃん。

隠し子がいた。

夜祥ちゃん。

産まれてすぐ養護施設に預けられ、それから八年間、音信も何もかも断絶していた。

つい五カ月前まで知らなかった事実。

ずっとお姉ちゃんと二人きりの家族だった。お母さんは死んで、お父さんはいない。姉妹で親子みたいだった。のに、つい五カ月前まで、三人の家族になるその瞬間まで、あたしだけ知らなかった事実。

夜祥ちゃんは、お姉ちゃんの娘。血の繋がった親子。

あたしは夜祥ちゃんの叔母さん。血の繋がった姉の妹。

姪っ子を加えて、血の繋がった家族。

家族なら、いっしょに暮らすのが当たり前。

親子なら、いっしょにいるだけで幸せなのが当たり前。

甘えて甘えさせて、あたしが入る余地がないくらいいちゃいちゃしてるのが当たり前。当たり前マエダのこんこんちぎ。

二人は親子。八年ぶりの、どころかもしかしたら八年遅れでようやく初めて出会えたのかもしれないという関係。

ようやく元に戻れた二人だから、今までの失われた時間を取り戻すかのように、目と目が合うだけで自然と――

「笑わねええ……」

プリクラの筐体にこめかみでキスした、ひゃあ、ちべたい。

薬局と古着屋に挟まれて小ぢんまりとしたゲームセンターだけ

ど、店先にいるだけでもピコピコキュウンピキュウンギョインギョインバアアアアアアアアアのせいで他の店がかけてるBGMがまったく聞こえない。当然、前方二十メートルくらい先をとことこ歩いているおねえちゃん&よるたん母娘ペアの会話も、二人がどんなに猛烈にはしゃぎまくったところで、あたしの耳に届くことはない。

まあそんなのは、まずあの二人の間に会話があつてから気にすべき問題ですが。

「お前の報告はもちろん話半分で聞いていたが、これは予想以上だな」

ひなっちは他の筐体に背中で寄りかかっていた。いつの間にかあたし以上に神妙な顔をしてお姉ちゃんたちを見ている。

「ここまで会話の気配すら一切なし。手も繋がらない、目も合わせない。衛幸さんがときどき振り返って夜祥ちゃんがちゃんとついてきてるか確認するだけ……というかどこまで歩くつもりだ？」

「このまま商店街の端まで行っちゃうね、間違いない」

「何がしたくて？」

「ショッピングに決まってるじゃん」

「とてもそうは見えないんだが」

「おそろくだけど、お互い自分たちが楽しそうにショッピング

してる様子が想像できないんだと思う」

「……何だそりゃ？」

おっとり移動。少し大胆に、ターゲットまで十メートルくらいの距離に詰めて、二階が靴屋で一階が靴屋の店の前で止まる。隣はテナント募集中で、そのシャッターの前に陣取ったパステルカラーの屋台から、生クリームの甘い香りが漂ってくる。

「クリスマス限定、抹茶のTスベシャルREッリEッリきらきらトナカイのいけづくり風ジャンボソフト。いかにも女の子が食いつきそうなメニューだったというに」

「最近の女の子はよくわからんが、あの二人は見向きもしなかったな」

何もこの屋台に限ったことじゃない。お姉ちゃんが先を歩いてその半歩後ろをよるたんがついていく、アヒルみたいなあの親子は黙々と歩くだけで、立ち並んでいるどのお店にも目くれない。ひよいと屋台の脇から中を覗くと、パフェやソフトクリームの並ぶショーケースの向こうで黒ひげのサンタみたいなおじちゃんがころなしかしよぼくれた顔をして立っていた。アヒルつつか色の的にカルガモみたいな親子が目の前を通ったのにエサへ見向きもされなかったのだから当然の反応だろう。元気出せよ、おじちゃん。あたしが一つ買ってやつからさ、一番安いやつね。

「衛幸さんって……」

「んー？」何を言いかけたんだい、ひなつち？ ちよつと待ってね。へい、おじちゃん、おいくらだい？ は？ 四百円？

「いや、衛幸さんって、あんな人だっただろうかと思つて」

「おうおう、まひなん、最後まで言っちゃえよ。おめえさんの中の先入観オブ衛幸さんゲロっちまえよ。ねえ、おじちゃん、もうちよつとまかんない？ アイス一個四百はきちーよ。シーズンオフで売れないのわかるけどさあ」

「聞く気があるのかお前は？」

「聞く聞く、全然聞いちやうつての。あたしはいつでも真剣だよ？ ほら、せめて四段重ね！」

「……衛幸さんと直接話したことは、まだ数えるくらいしかないが、あそこまで無口というか、周りに無関心で無神経な人という印象じゃなかった。確かに必要なこと以外はあまり口に出さないが、必要に応じたら、それなりにジョークも言える人だろ。妹のお前から見てもそうじゃなかったのか？」

「うっほう！ おじちゃん太っ腹！ いや見た目じゃなくて人間が太っ腹！ イエスツ、ダンディ！」

「おい、こつちは真面目に——」

「聞いているつてば。あたしから見たお姉ちゃんでしょ？ ふーん、どうだったかなー」

「どうだったかって……ああ。ったく」

ひなっちどうやら気がついたらしい。そうだよ、きみはさすがだ。たった数回話しただけで、妹のあたしと同じくらいお姉ちゃんの人間像ってものを見抜いちまっている。

あたしのお姉ちゃんは、《衛幸》という名の人間は、自分の家族に限らなくても、誰かにあそこまで無愛想な態度を見せたりなんかしない。いくら離れて生きてきた自分の娘に今さらどう接していいかわからないからって、尻尾を巻いて逃げ出すような弱い人でもない。ずっといつしよに育ってきた妹のあたしだから、確信を持ってそう言える。

だからこそさらに、今のお姉ちゃんはとてもおかしいとも、誰かが背中を押さなくちゃ、あの親子が駄目になってしまうとも、確信を持って言えるのだ。

それにおかしいのは、たぶんお姉ちゃんだけじゃない。でなきゃきつと、あたしが最初にひと肌脱いだ時点でもう問題は解決に向かっている。ひと肌どころかふた肌、み肌、あたしはすでに脱ぎに脱ぎまくってもうずるつずるのべろんべろんだ。フレッシュな人体模型だ。それでもまだ吉兆は見えないから、こうして今日もお節介を焼きに来てる。

「わかった。もう少し付き合う」オトコひなっち、ついに腹を決めたらしい。「日没までは。それ以降は何があっても無理だ。

母さんと父さんに、聖夜の晩餐を待たせるわけにはいかないからな」

「ありがとう、まひなん。そこで見守っててね。聖夜に捧ぐあたしの第一投目」

「ちよっと待て。なぜアイスクリームを振りかぶっているおいつ——」

銀ちゃん投手、投げました！ 美しい！ 美しいフォーム！ 投球は、伸びる、伸びる！ トルコアイスのように伸びる！ ストライクゾーンまっしぐら！ ごめんね、よるたん。あたしが似合う似合うって全力で推しまくったそのポンチョ、あたし自身の手で台無しにしちゃいますうツ！！

ど真ん中、ストライイイイツク！！！！
パアアアン

ファア………る!!

「やっぱ！ ひなっち、隠れて隠れて！」

「だああツ、またまを抜いた！ どうか何をしとるんだお前は!？」

「おじちゃん、ごめんね！ お詫びに後で一番高いやつちようだい！」

パニックでハイになってるひなっちを靴屋の入口から靴屋の外階段へ引つ張り込む。あたしがぶん投げた四段重ね上からソ

ルト、抹茶、ドラゴンフルーツ、パイヤのアイスクリン三百二十円は十五メートル先のよるたんの背中に向かって直進してその向こうにいたはずのお姉ちゃんの手叩き落された。よるたんの背後へ回り込むのを含めてほとんど動きが見えなかった。我が姉ながら怖ろしい神速。というか背中に目でもついてんの？

「いったい何を考えてるんだお前は!?　そしてまを抜くんじやない、まを!」

「どうどう、守雛くん。エンゼルスマイル発動する余裕もなくなつとりますやん。いやね、よるたんの服がアイスでべったべたに汚れば、さすがのお姉ちゃんもそこらへんの服屋にかけ込まざるを得なくなるっしょ?　というアレで」

「ひたすらろくでもないな!」

「いやしかしまさか向こう向いてるお姉ちゃんに阻止されてしまうとは。面目ねえっす」

「もともとどこにもないだろうがッ。それどころか今のでこちの位置がバレたんじゃ……」

ひなつちがそろそろと階段の外をうかがう。階段の外側を覆う壁はすべてすりガラスと透明なガラスの市松模様になっていて、透明なガラスを覗き穴にすれば外の通りが見える。見本の鞆がたくさんかかっているから、通りからは階段にいる人の姿

がつかみづらい。あたしも臆さずガラス越しにお姉ちゃんとよるたんを探す。

「動いてない?」

「動いてない。というか動じてないな。衛幸さん、冷静に手拭いてるし、夜祥ちゃんはそれをじっと見てるだけ……」

「基本的にクールなのも災いしてるよね、あの二人」

「……」

お姉ちゃんは一応きよろきよろして犯人を探している。当然見つからない、そりやそうだよな、もう逃げ去ってるよな、というピンポンダツシユ慣れたオバハンみたいな落ち着いた顔をして、ハンカチをつまんでいた方の手をよるたんに差し出す。さすがに一人で歩かせとくのは危ないとても悟ったか。でも繋ぐだけじゃダメでしょうが、なんか言えよ。よるたんももっと意外そうに驚くか嬉しそうな顔しろよお、なんでもないことみたいに握り返すなよおー。

「ぶー、やはり前途多難。いいもん、銀ちゃんは敵が強すぎるほど燃えるタイプなのです。いざゆかん、守雛殿、ジャンボソフト割り勘じゃダメ?」

「帰ろう」

「ジョークだよ、ジョーク。冗談だからね、ちゃんと全額自腹切るから、ね?　ね?　あ、でも食べるのは手伝ってくれると、

ちよつと嬉しいカナ―」

なんつって、と階段を降りかけたところで、腕をつかまれた。後ろから。ひなつちの手。

「へ？ なに、どつたの？」

「割り勘にしてやる。それ買ってお店の人に謝ったら、そのままいっしょに帰る。いいな？」

「ちよつ?! いきなり何言つてんの、ひな――」

「まを抜くな」

ひなつちが手をあげる。

体がすくんで、あたしは思わず目をつむった。

ポント、肩に手が乗る感触。

目を開けるとそこにひなつちはいなくて、あたしの隣を通り抜けて先に階段を降りていく。

「ダメ！」

あたしは、ひなつちの手が肩から離れる前に、その手をつかみ返した。

「ダメだよ、ひなつち。帰らない」

「ええい、まを抜くなと何度言わせれば――」

「あの二人を見たでしょ。あれで親子。あれが親子？ そんなんでいいわけじゃないじゃん！」

「……銀霞」

手を引かれて振り返る。ひなつちはあたしを滅多に名前で呼んでくれない。その彼が、半分いぶかるような、半分あわれむような顔であたしを見ていた。

「あの二人は大丈夫だ。衛幸さんと夜祥ちゃん自身に任せておいても、取り返しをつかないことにはならない。なるようになる。どころか――」

「……どころか？」

ひなつちは信じられないことをあたしに言った。「どころか？」そうくり返して言ったら、もう考える気が起きなくなった。「どころか？」考えるより先に言葉が出てくる。ぐちゃぐちゃのまま処理されない感情が、言葉にするまでのいろいろな工程をすっ飛ばして出口付近に殺到していく。どころか、どころか、どころか、どころか、どころか！

「見てればわかるだろ。あの二人は、もう充分親子だ。お前が何をしなくても、すでになるようになってんだ」

「どころかよ！ どころか親子よ、あんなのどころか親子!! 手を繋いでもニコリともしない、いっしょにいてもいっしょにいるだけ！ 黙り込んで！ 気だけ使つて！ そんなの逆にお互いが傷つくだけだつてわかるでしょ!? なのに何もしないで、本当の親子になんかなれるはずない！」

「それはお前が……」

「あのままじゃダメなの！ 親子なら幸せそうにしないでなとダメなの！ 目が合ったら笑って、肌が触れたら恥ずかしそうに笑い合って、あの二人だけじゃそうならないから、あたしが手を貸さなくちゃダメなの！ あの二人が本当に親子になれるように、何も知らずに生きてきたあたしが、面倒みてあげなくちゃいけないの！ だから——」

「四百円？ ちよつと高すぎんじゃね？」

階段の下から声が聞こえた。靴屋が流しているジャズに混じって、女の人の声が。

「だって三段だろ？ せめて四段にしてくんないかな。実際原価そんなに変わんねえだろ。なあ、おっさんよ？」

間違いない、お姉ちゃんの声だ。あたしと同じこと言ってる台のおじちゃんを困らせている、さすがは姉妹。じゃなくて！

やばいやばいやばいやばい。

全部聞かれていた!!

我に返った瞬間、あたしはすでに全速力で靴屋の階段をのぼり始めていた。

「おいっ、ちよつ、銀っ」

「ひなっち、あとヨロシク！ アイシテルから！」

「なっ!? だからまを抜くなって——」

「おっ？ ひな坊じゃねえか？」

靴屋の開いたドアのすき間へ飛び込んだのと同時に、階下からひなっちのでない弾んだ声が追いついてきた。

★

というわけでここからはひなっちこと守雛がお送りします。

いいえ、僕自身は《ひな》とまを抜いて呼ばれるのが大嫌いですので、不本意の紹介となります。

「おう、やつぱりひな坊じゃねえか。なんだ、さつき大声出してなかったか？」

「まひ坊とかならともかくひな坊はやめてください。まを抜かれるのは嫌いです」

「言いたいこと言う前に挨拶はするもんだぜ、ひな坊」

「こんにちは、衛幸さん、奇遇ですね。ところで、僕の名前からまを抜かないでくれませんか？」

「なあ、ひな坊、ついさつきまで銀霞もここにいなかったか？」
「……」

あの妹にしてこの姉ありか。いや、人が怒った目をしていても気にしないこっちの方がタチが悪いだろうな。と思ったがやはりどっちもどっちだなと、背後の階段を上っていった先にある靴屋に意識を向けてどんよりとした気分になる。ピアノジャ

ズを流す靴屋の入り口で僕は、今年のクリスマス・イヴの例年
にない厄介さに心の中で歯がみしていた。別にその不平不満を
臆面もなく顔に出したところで目の前にいるこの女性は動じな
いだろうから八つ当たりに見せつけてやってもいいが、虚しさ
が増すだけとわかればどちらかという溜め息しか出ない。

「はあ……別に誰もいなかったですよ。最初から僕一人です」

「そうか？ 似た声でしたと思っただが」

「気のせいじゃないですか？ 僕も大きな声は出してませんよ。
そもそも銀霞さんは今街に？」

「いや、今日は友だちの家に遊びに行くって聞いている。とか言
いながら男とデートしてもおかしくねえと思っただけど
な。ひな坊が一人なら違うか」

衛幸さんは一人で納得している。会話が広がる前にさっさと
この場を離れてしまうか。銀霞のことをフォローしておいて何
だが、衛幸さんがこのままついでにと靴屋へ入っていったこと
ろで、僕の知ったことではない。

「じゃあ、僕は少し急ぐので、これで」

「まあ待てよ」

衛幸さんの指がキャソツクの背をつかむ。スタンドカラーは
こういうとき首筋に食い込むので不利だ。咳き込む一歩手前ま
で行った。目尻に涙を溜めて立ち止まる僕の肩に、衛幸さんが

外気で冷え切った手を回してくる。

「聖誕祭の準備で忙しいはずの家の子が街をぶらついてるって
ことは、実質ヒマしてましたってことだろ？ だったらちよっ
と付き合えよ。な？」

「ぼ、僕は母へのプレゼントを買いに……」

「おーおー、見あげた親孝行っぷりだ。いいぜ、そいつに協力
してやるよ。なるべく大人の女の趣味に合いそうなやつがいい
んだろ？ 大人の女っていうか」

母親の——と、衛幸さんは最後の部分を耳元で囁くように言
った。ハツとして顔をあげた僕の視線の先にちやうど、小さな
女の子が立っていた。コーヒーブラウンのポンチョを着た、子
犬みたいな女の子。月の出を待つ池の淵みたいに黒い瞳で僕を
見ている。椿色の小さな舌を突き出して、ソーダ色のアイスク
リームをこちよこちよくすくっている。

「四段重ね……」

「なかなか話のわかるおっさんでな、あれで三百円に負けても
らった」

「こんな寒い中であれ全部食べたらお腹壊しますよ、夜祥ちゃ
ん」

「だよな、やつぱり。半分食べやってくんない？ 何かあった
かいもんおごるからさ」

女の子の名前をいきなり出して動揺してもらえなかった時点で、おおむねのことは衛幸さんの手の内にあると確信させられた。その後の魂胆もずいぶんと見え見えだったが、僕は素直に諦めてから、「日が沈むまでですよ」とあえて断ることで降参を示した。

★

衛幸さんと夜祥ちゃんは、改めて二人が親子であると聞かされてもなお感心できるくらいによく似ていた。目鼻立ちといい、雰囲気といい。二人とも考えていることが顔に出ないし、感情は必ず婉曲的にか言動へ繋がらない。常に涼しげにのんびりと構えている衛幸さん。冷めてぼんやりしているかのような夜祥ちゃん。二人の違いは醸し出している芳香の温度差と、あとは髪の色と身長くらい。

「人に甘えるってことを知らねえんだ」

本屋の二階の喫茶店に入り、注文を取ってもらってしばらくしてから衛幸さんが出し抜けにそう言った。

「甘え方を知らないっつーよりか、甘えるとか頼るっていう発想自体がそもそもねえのさ、銀霞の姪御殿には。何でも自分の力でやろうとする。だけじゃなくて、末怖ろしいことに、自分

でやれそうにないことはしつかり見極めてきっぱり諦めやがる。したたか極まりない」

「はあ」

感想も疑問も言葉にしてよさそうなものが咄嗟に思いつかず、僕には彼女と面と向かって曖昧なあいづちを打つしかなかった。身内自慢の聞き役ならいつもどこかの銀なんたら様のお相手をさせられるおかげで慣れているつもりだが、はたしてこれは身内自慢なのだろうか。

話題にあげられている当人は、僕の隣で運ばれてきたばかりのホワイトココアの分厚い湯気を吐息でほぐす作業に明け暮れている。なぜ衛幸さんの隣でなく僕の隣に座ったのが不審に思われてならない。とりあえず僕の方がボックス席の窓側なので、ドリンクバーを訪ねる際はこの二桁近く年下のマドモアゼルに道を譲ってもらわねばならないらしい。《抹茶ミルクのおかわりが欲しいので、ちょっとどいてくれないかい、お嬢ちゃん？》ものすごくやるせない。

まさか、そういう心理で僕がテーブルから離れられないようにする作戦か。いくらなんでもしたたかすぎるんじゃないか、親子そろって？

「煙草、いいか？」

僕が夜祥ちゃんの手元をじろじろ見ているうちに、衛幸さん

は口に綿棒くらい細い芯をくわえて、片手にライターを握っていた。僕が答えるより先にオレンジ色の火がともる。テーブルの上に出されていたのはコンビニなんかでは見たことない気がするやたらと細身のパッケージで、表に青っぽい緑色の葉っぱのイラストが入っていた。

「……そういう話、本人の前でするのはどうなんですか？」

僕のスコーンはまだ運ばれてこない。とりあえず差し迫った疑問を口にしてみた。あまり意味がないとはわかっていたが。

とはいえ、衛幸さんは少なくとも今くわえた煙草を吸い切るまではひとことも発さないともおかしくなかった。

「最近の小学校教師は温厚らしい」最初の煙を吐いた衛幸さんが、フィルターを口から離れたまま言った。

「……何の話です？」

「おれがお前の立場で、夜祥のクラスの担任だとしたら殴りかかってるって話だ」

「ああ」

よくわからない自虐だ。殴るほどのことではないんじゃないかとも思う。それに今の僕は、三者面談をする教師みたいな位置に置かれているのだろうか。しかし夜祥ちゃんが隣にいるおかげで配置としては《親》にいるような感じもする。あれ？ でも三者面談って、親子が同伴で会場に入っって教師の前に

座るって構図がそんなに当たり前だったかな。子供と教師が並んで親を待ち構えるって構図も全然珍しくない気がしてきた。というかまず何より、《子》の位置は絶対に夜祥ちゃんだろうか？

「今日きょうび日の日本じゃ、あなたほど凶暴だと小学校教師にも高校教師にもまずなれませんよ」

「ひな坊、そいつは違う。間違ってるぜ、ひな坊」

「二回……」

「そもそもおれは教師にならない。向かないと知ってる」

「あなたみたいに凶暴な警察官もどうかと思いますよ僕は」

「警官より向いてなかったってことでもねえのさ。才能ってのはよく競合するもんだろ？」

「何なら向いてたっというんですか？」

「聖職者」

「夜祥ちゃん、抹茶ミルクのおかわりが欲しいのでちよつとどいてくれませんか？」

「人の親だよ」

ティーカップを持ちあげそこなった。取っ手に指をかけただけの僕の手に、吐かれたの紫煙がまとわりつく。

衛幸さんは、芝居がかってはいしたが堂々とした口調と表情で言っってのけた。

「親になる才能がある人間は教師にや向かねえ。銀霞からいつも聞かされてんだろ？ 姉貴は母親のかがみだつて」

「……」

僕はこの女性に何かしただろうか？

彼女と会話らしい会話をするのはこれが三回目か四回目になる。女性がいい年をして自分のことを《おれ》と呼ぶことや同様な口調のせいで最初からガラの悪い印象はあったし、実際彼女にはひやかしと言える程度に人をからかって喜ぶ趣味もいくらかあった。けど、それでも積極的に絶えずそういうことをしたがるタイプというわけではなかったし、好きだからといって盲目的に執着を見せたり人にこだわりを押しついたりすることのない、表の要素から取れるよりもはるかに自律と思慮に富んだ女性だと僕は思っていた。にぎやかな雰囲気にもなじむけれど、どちらかといえば悠然として静かな人——そんなイメージ、数回話したことがある以外は妹の友人という程度の接点しかない高校生をほとんど強制的に連れまわす暴挙に出た時点ですでに覆されたようなものだったけれど、ここへ来て発されたジョークは輪をかけてタチが悪かった。愛嬌のある露悪趣味の範疇からは著しく逸脱し、倫理観から僕に疑わせるほどのもの。冗談で済まない冗談がどれかわからない人ではない。あえてなのだとしたら、あけすけな挑発か。

僕は自分の席に座り直して深く溜め息をついた。向かいでは衛幸さんがわざとらしいとぼけ顔で煙草をふかしている。今の彼女の方が、なるほど、あの妹にしてこの姉か、という感想にじっくりくるようだ。僕が持っているあいつへの印象も相当悪いらしい。

「で、僕は何を話せばいいんです？」

「ふうん、こいつはたまげた」全然たまげていない顔で目を伏せたまま衛幸さんは言った。「お前くらい察しがよけりゃ、つかみかかってくると思ってたんだが」

「頭の中でそうしましたとも。そのあと床を舐めた味も想像する羽目になりましたし。いいですか？ いい大人なら、ただおちよくるためだけに前途あるいたいけな聖職志望者を捕獲した挙句に、いともたやすく性悪説論者に転向させるへ、マをわざとやらかしたりなんかしないわけです。何が面白くてまわりくどい手を使っているのかわかりませんが、いかげん本題に入っ

てはいかがです？」

らしくもない、と最後呟くように付け加えると、ようやく衛幸さんは反応を見せた。心なしか意外そうにこちらに目を向け、それからすぐに口角を持ちあげる。何がお気に召したのかあるいは癪に障ったのか知らないがどちらにせよ気をよくしたらしく、まだ半分も吸っていない煙草を灰皿に置いて手離した。

「じゃあ訊いてやんよ。銀霞とはどこまで行ったんだ？」

「……は？」

「は、じゃねえよ。うちの妹君との関係はどこまで進んだのかって訊いてんだよ。まだ外泊させてくれーって一度もあいつからは言ってこねえけど、学生の身分で朝焼けコーヒーなんてゼータクなどころまで行かなくなつてやるこたあやれんだろ、所構わず、ホレ、更衣室とか、懺悔室とか」

「いやっ、待ってください、いろいろ待ってください、明らかに僕の実家の事情をふまえた度しがたい侮辱をついでに受けている気がしますけどひとまずそれは置いておきますからまず先に——いやアンタいきなり何言い出すんだ？ 馬鹿か？」

思わず地が出てしまった。衛幸さんにシシと音を立てて笑われる。僕は眉間を指で強く揉み押さえた。

「っ……どうしてここであいつの話が出てくるんです？」

「そりゃあお前がさっさと本題に入れつつたからだろ」

「まったく意味がわからないんですけど。だいいち、子どものいる前でなんて話を……」

言いながら隣の夜祥ちゃんの様子を盗み見たところで固まった。

夜祥ちゃんはいつの間にか自前のらしきスマートフォンを取り出して、その画面を何やら熱心に眺めていた。小さな両手に

左右から挟み込まれたその液晶にのぞき見防止のフィルターはついていない。そこには黒い背景に白抜きで、斜めから見てもはっきりわかるほど大きくシンプルな文字列が表示されている。寝ても覚めてもその表示だけだ。夜祥ちゃんはさながらその表示が消えないことを確かめ続ける見張りのようだ。

僕は無言で見張り番の手からスマホを奪取した。上からつまんで造作もなく奪取に成功した。《録音ちゅ♥》と表示されている液晶を電源ごとオフにして漆黒に染めあげ、目の前の保護者に提出した。

「僕もう帰っていいですか？」

「残念ながらスコーンを頼んだ時点でお前の負けだよ、ひな坊。この店は作り置きしてねえんだ。焼きあがるまでにあと十分はかかる」

「いや、いいですし、お二人にごちそうしますし、親子水入らずでなかよく分け合って食べればいいですし、僕は今度一人で来て一人で食べますから、ではさようなら」

こうなったらテーブルの下を這うかソファを後ろへ乗り越えてでも脱出してみせようとしたところで、隣から夜祥ちゃんが寄りかかってきた。いったん動けなくなつたがこのぐらいなら想定していなかったわけではない。すがりつかれたからといって無理に振りほどくことは考えず、抱きあげていっしょに通

路へ出てしまえばいい。なんとなくだが下手に手足を振ってじ
たばた暴れる夜祥ちゃんというのは想像できなかつた。体も小
さくて軽いだらうから優しく扱えば問題ない。女兒、恐るるに
足らず。

眠ってさえいなければ。

「!?」

僕は重大な勘違いをしていた。夜祥ちゃんが僕の退席を阻む
べくしがみついていたものだとはばかり思っていた。それにし
は頭で僕の二の腕にもたれかかってくる程度でしかなかった上
に、手も片方で僕の服の裾をつかんでいるだけだったというこ
とに夜祥ちゃんを見おろすまで気がつかなかった。

眠っている。すやすやと、おねんねをしている。

いや、あり得ない。つい二十秒ほど前まで耳年増に興じ(?)
てスマホの操作に熱中していた少女が、いかに寝つきがいいか
らといって、いたずらを封殺された失意もそこそことうとうと
眠りについただなんて茶番もいところ、間違ひなくためき寝
入りだ。

そんな演技に騙されはしない。騙されはしないが、しかし、
それがどれほどのことだというのだろう。

僕に触れている小さな頭、小さな手。衣服にくるまれた薄く
華奢な胸と肩と腰と、そこから力なく投げ出された細く短い二

本の足と。しつとりと閉じたまぶたの下は細いまつ毛でふん
んに彩られ、桜色の頬は月よりも美しい輪郭を描いてやまず、
わずかに開いた唇は呼吸の有無すら不安になるくらいに儂げだ。
それらすべてがまさに《神聖》だった。僕の目にはあまりに神
聖すぎたのだ。目の前のその現象を壊してしまうこと、乱して
しまうことが何ものにも勝って恐怖すべき冒瀆に思えてしまっ
た。すでに触れていることさえ罪深く感じられる。かつてホー
ムステイとして訪れていたオーストリアのとある教会を思い出
した。そこに飾られていた聖母の像を見たときと同じだ。僕は
指一本触れてはならない、触れられている肩を微動だにさせて
はいけない。そうしてはいないとポロポロに砕けてしまう。僕が。
僕の魂が、再起不能の危機に直面し恐怖している!

信仰の先に自壊があるなどと、僕はまだ実感を持ったことが
なかった。ましてやさらにその先など想像したことすらない。
いったいそこに何があるというのか。

問う前に危うくその答えを知ってしまいかける苦難から僕を
救い出してくれたのは、この聖女の母親だった。いつの間にか
席を立った衛幸さんが、通路から身を乗り出してそつと夜祥ち
ゃんを抱きあげていったのだ。聖母には程遠いはずの彼女がこ
のときばかり神々しく見えたのは、僕を背徳の境地から遠ざけ
てくれたからと言えるのみだろうか。

聖女は母の腕の中でいまだまぶたを伏せたままにいる。人の袖をつかんでいたかよわい御手は、揺りかごから零れ落ちた布のようにだらしなく貧相に垂れさがっていた。

「悪いな、ひな坊。こいつ、本気で突然寝始めるから」

そう言つて衛幸さんは、はにかむように苦笑する。

それを見て、ようやく僕は胸をなでおろすと同時に、ごく一般的に驚き呆れ返ることができた。

母親よりも娘の方が、母親の手に余るほど厄介だったとは。

いや、子どもというのは元来こういうものかもしれない。夜祥ちゃんのことをもの静かな普通のよい子だと思っていなかっただけに、僕は勝手に不意打ちを食らつて勝手に戸惑っているだけなのかもしれない。子どもとは元来、持て余すもの。

それでも、夜祥ちゃんの寝顔を見る衛幸さんの姿は、どこことなく幸せそうに映る。

ふと、無性に訊いてみたくなった。

今まで訊こうにも訊けなかったこと。訊かない方がいいなら訊かなくていいだろうと、当たり前のように割り切っていたこと。

衛幸さんが自分の席に戻つて、夜祥ちゃんを先に座らせて、自分が座ると同時に夜祥ちゃんの肩を自分の方に倒すまで、僕は待った。

「……衛幸さん」

「？ 何だい、ひな坊？」

「ひな坊と呼ぶのをやめて、僕の質問に答えてくれますか？」

「人の質問には答えねえくせにか？ ガキくせえうちはいつまでたつても間、抜けの雛だぜ」

鼻で笑つてそう言われたけれど、不愉快の裏返しではないよ。うで、衛幸さんのまなざしは穏やかそのものだった。見つめ合いなながらややあつて、「いいぜ。訊きなよ」と返してくれる。

「どうして、夜祥ちゃんを」

落ちて口を開いたはずなのに、逡巡が生まれた。何を訊こうとしていたのかを振り返つて、少し変更すべきと結論づけることになる。最初に思いついていた質問は、僕の役目ではない。そう思ったから。

「——引き取ることにしたのは、なぜなんですか？」

穏やかな目をしたまま衛幸さんが息をついた。「グソ真面目に訊くよなあ」と茶化し半分に戻れ、けれどはぐらかしたいようではなく、ただ答えを探すようにテーブルの隅へ視線を向けていた。そこに置いてある灰皿から吸いさしの煙はもはや上がっていない。

「……本当に親子だから。じゃ、ダメか？」

「あなたが本気で答えられるのであれば、それで納得する覚悟

はできています」

今度こそ衛幸さんは目を白黒させて僕を見た。それから笑う。誰かをほめるときのように。

「別に」と彼女は答えた。

「言うほどの理由なんかありやしねえんだ。自分をひととおり育て終わったような気になったから、新しく育てるもんが欲しくなった、ちようどおれが育てちまっていいものがすでにあつたから、のこのこと引き取りに行った。それまで思い出しもしなかつたものを、ある日不意になんとなく。実際その程度」

おかげでいろいろと思ひ知らされる毎日さと言って、衛幸さんは夜祥ちゃんの髪を愛しそうになつた。自分に似ず、下へすくと落ちる黒い髪。

「夜祥ちゃんはあるたのことを覚えては？」

「んなわきやねえ。覚えてるも何も、おれの顔どころか乳の味すら教えずにいたんだ。写真見せられても実際顔突き合わせても、ピンとなんてこなかつたらう。こつちは死ぬほど痛かつたつてことだけは一応覚えてたけど、やつぱり再会して『ああ、クセツジューネン』みたいな感動はこれっぽつちもなかつた。こういうとこで似た者同士つて言葉を使うのは、まあ間違つてんだらうけど」

衛幸さんはまた笑う。

親子としての再会以後、二人の間にどんなやり取りがあつたのかはわからない。今なら訊けば教えてくれるにしても、やはりそこへ踏み込んでいくのは僕の役目ではないような気がした。ただ、衛幸さんは夜祥ちゃんを無理やり取り戻すことができたとしてもそうはしなかつたはずで、そして夜祥ちゃんは今、衛幸さんと共に暮らしている。という結果がすでに目の前にあるのなら、僕なんかが訊いていいことは残り一つだけ。

「守雛よ」

けれどその問いかけは、問う前に答えを示されていた。

「おれが一度も後悔だけはしたことがねえなんて思うか？」

答えられない僕を見て、衛幸さんは肩をすくめるような仕草をする。と、片手で茶色い小さな手帳をどこから取り出して、テーブルの上でページを開いた。合皮張りの表紙から二ページほどをめくつて手を止める。そこにあるものを僕には見せず、衛幸さん自身の口が詩のように読みあげた。

「世に片時として自ら悔いぬ行いがあるか。あるとすればそれは今わの際の言葉だけ。また一時の否定は永遠か。種なれども必ずしも芽は出ず」

パタンと音を立てて閉じた手帳を、彼女は下に戻さず胸ポケットに入れる。「自分以外の面影つてのをこいつに見たことはまだない」入れ替えるように煙草の箱を取り出しながら、伏せた

目で夜祥ちゃんを見おろした。「自分のも結構薄いけどな」苦笑。「それでも、たまに絶望したくなるときくらいある。血が濃いんだ。この先あり得ねえとも限らねえ。そう考え始めると、いつしか不安でどうしようもなくなるときがある」

彼女はライターを取り出さなかった。

中身を確かめるように箱を振り、そのまま何もせずにテーブルの隅の灰皿のそばに置く。

何かをしながらでなければ話をしていても落ち着かない。まるでそういうふうにも見えた。ヒントをいくつももらって、僕の中にも確信めいたものができあがっていた。

「また日々思い知らされてもいるんだ。自分なんか育て切ったとばかり思っていた。って、さつきも言ったな。だが伸びしろはたつぷり残ってたってわけだ。娘なんて一人で手えいっばい。難しいことはするもんじゃあない。最初に言ったことは覚えてるか？」

「最初、というと？」

「この店に来てからだ」

「ああ」

スコーンのことではない。一応その次。人に甘えることをしない夜祥ちゃんについて。

「甘えさせ方ならよく知ってるつもりだったよ。銀霞がいたか

らな。でも、この笑わねえチビスケは初めからそんなもん求めちゃいなかったんだと思う。本当のところは今もあんまりよくわかんねえけどさ。なにせどう扱っても文句ひとつ言わねえし、感謝の言葉も口にしねえ」

衛幸さんは膝で眠る少女を静かにののしった。「薄情な小娘だよ」と。

「薄情なら調教してやりやあよかった。根暗で無気力な性根を叩き直して、甘えるべきときに子どもらしく甘えてくるよう躾けてやれば、情に厚くて感受性とか豊かな子どもに生まれ変わって、万事解決してたのかもしれない。それまでの夜祥はニセモノで、ホンモノの夜祥が帰ってくる。——おれはそういう^{うえ}強^ええ母親^{おとこ}には向いてなかったよ。そもそもまともな親つてもんをよく知らないせいかね、なんだかんだ似た者同士でお子様同士、同レベルで、持ちつ持たれつってやつなのさ」

「……それじゃあ、銀霞さんは納得しませんよ、たぶん」

納得させる必要がないのはわかっていた。今話しているのは衛幸さんと夜祥ちゃんの問題だ。そこにおいて銀霞はいうなれば他人、それもかなり恣意的にもものを見るタイプの、ありふれた一般の人々と同じ位置にいる。

衛幸さんも夜祥ちゃんも、人からどう見られるかなど気にしてはいない。人に自分を巻き込ませず、自分に人を巻き込まな

い。二人ともそういうタイプだから、今の関係でうまくいっているのだともわかっていた。

それでも、衛幸さんが銀霞のことをどう考えているのか知りたくなった。巻き込みたくても巻き込まない、巻き込まれたくても巻き込んでもらえない位置で、めげずに奮闘してきたあいつのことを。他人だとしても、すぐ近くに続けたはずの。

「ようやくその名前が出たな」

衛幸さんは我が意を得たという顔をしたが、その目のやさしさはやっと安心できたと言っていた。僕がずっと触れずにいたことで、思いのほか気を揉んでいたらしい。

「わかつちやいるさ。わからねえわけがねえ、あんだけ親子がテーマの映画ばかりしこたま見せられれば、言われなくても罰ゲームだってわかる。一番近いやつは、頭の年齢が七歳の父親が法廷で娘を取り合ったりさらって逃げたりする話だった。父親よりも娘の父親への執着つぷりが異常でさ。感動モンなんだろうけど、てめえの父性は七歳児に劣るって、最後まで言われてる気分だったぜ」

「あなたは妹に甘すぎる」

「だろうな。あいつの洋画趣味には正直ついていけない」

「あいつの本当の趣味はホラーやアクション映画ですよ」

「もつとついていけそうにねえな。グロいのは苦手なんだ」

「でもあなたは形ばかり付き合い続ける。あなたは本当に妹に甘い」

「厳しくつっぱねてりゃあ、今ごろあんな残念な阿呆には育たなかったのかねえ」

「たぶんもつと残念な阿呆になってます」

「……お前、あいつにはホント容赦ねえな」

「はげた筋肉質のイギリス人がテーブルまみれでぬるぬるになって格闘しているシーンで目を輝かせる女の子のタガが外れたとなれば、残念で阿呆な結果しか見えてきませんよ」

「あー、なんか見た覚えあるぞ」

あいつと同じ屋根の下で暮らしている衛幸さんが、あいつの趣味を僕より理解していないはずがなかった。

だから、僕なんかよりもはるかに強く実感できているはずだった。あの残念な阿呆がしてきたことを。父親に執着する娘のような献身を。

「映画一本が普通二時間あります」

「ネタに使いそうなのが三本に一本見つかるとして、単純に六時間。さらにおれたちに見せてる間、推移を見守るのにプラス二時間。その他諸々も合わせて延べ十時間ってところか」

「映画だけじゃないはずです。あいつがあなたたちのために用意してきたものは」

「そうだな。『私はもう見た。暗闇も、フラッシュのような光の瞬間のきらめきも』」

「ダンサー・イン・ザ・ダークですか？」

「正解。『過去の自分も見だし、未来の自分もわかっている』これ以上おれたちのために時間を使うなって、ひとこと厳しく言えればいいだろう。自分のことに時間を使え、お前をおれたちに巻き込ませるな、そうしてほしくて育てたわけじゃねえ、と」

「そこまでわかっているなら、どうして——」

「おれの役目じゃねえからだよ、ひな坊」

衛幸さんは僕を見てそう言った。

「言ったろ？ 娘は一人で手えいっばいだって」

ああ、この人はとことんまで——

「そういうつもりで、僕にあんな質問を……」

「有力候補だかんな」しやあしやあとのたまう。この人はこの人で僕に容赦がないらしい。

「なに、間に合わなくなったら助けてやる。だが今はまだ遅くない。ゆっくり茶を飲んでたって許される」

「あなたがそう思っているだけかもしれないよ」

「そのときは、懺悔室にでも足を運ぶさ」

ちよつど湯気の立つバケツトをさげてやってきたウェイトレスに、衛幸さんは紅茶を一つ注文した。

★

初めて入る店で頼んだスコーンは、衛幸さんに推薦されたものだった。遠慮で厚意を無下にする理由もなかった僕が、言われたとおりの注文をしたのも必然だろう。だから負けるも何も、最初から全部衛幸さんの手のひらの上だったということになる。少々やるせないがしかし、焼きたてで運ばれてきたスコーンの味に嘘はなかった。

「しかし、まだキスもしてねえとは……」

陽光が金色から濃くなり始めた街角へ出るなり、衛幸さんは僕を見て唇をとがらせる。先に本屋の店先に立っていた僕は、何も言えずに顔をそむけるばかりだった。アテのはずれた結果でお気に召さないのはわかるが、そもそも僕と銀霞はそういう関係ではない。とまで言及するとねちっこいひんしやく響壁ひんしやくをかうだけでは済まなくなりそうだったので黙っておいた。これ以上貞操に関する僕の名誉を傷つけられたら胃に穴があく。

本屋は車道がある道路と歩行者優先道路とが交差する角に位置していた。対角線上は靴屋で、クリスマスの装いからは若干縁遠い。そう思っていたら奥から出てきた一人の客は赤いリボンのかかった箱を抱えていた。店員が頭のトナカイのつのを揺

らして礼を言っている。やはりこの日はどこもそういう演出を
忘れないらしい。

トナカイのつものをつけた店員は、笑顔で客を見送り終わるな
り、店先の植え込みの方を見ていぶかしげな顔をした。こちら
からも同じ植え込みの陰から赤い三角帽子が突き出しているの
が見えている。店員が何か言いながらそちらに近づこうとした
瞬間、赤い帽子が飛びあがって、同じ色のボレロのような服と
毛皮のくつを身に着けた人影が歩行者優先道の方へ走り去って
いった。翻ったプリーツスカートの裾から一瞬派手な柄の下着
が見える。なんというかそんなところで認識できてしまった自
分が悲しい。

「あのサンタ衣装はどっから持ってきたんだ……」

「およよい？ お嬢ちゃん？」

後ろで衛幸さんが奇妙に戸惑うような声をあげる。振り向い
た拍子に何かが膝にぶつかってきた。危うくかかとで蹴りそう
になったところを踏みとどまって、僕の脇腹に顔をうずめてい
るものを確かめる。

「よ、夜祥ちゃん？」

「うにう……」

何かくぐもったよくわからない声を漏らしながら彼女は僕に
抱きついてきていた。抱きつくというより全身でもたれかかっ

てくる感じだ。結局店を出る段になるまで目を覚まさなかった
彼女は、衛幸さんが会計を済ませているそばで目をこすりこす
り、ふらふらしながらようやく立っていた。まだ寝足りないとい
うか、すでに寝ぼけているのだろうか。

「つて、ちよつ、うおおおお!」

僕が戸惑っているうちにお腹に巻きついていた夜祥ちゃんの
腕がゆるみ、小さな体全体が下へずり落ち始める。服が地面で
汚れると思いつきに肩をつかもうとしたが、その前に彼女の
両手がキャソックの前後のスリットから内側に滑り込んで僕の
ズボンのベルトにちょうど引っかかった。同時に夜祥ちゃんは
膝の力が抜けたらしく、僕のベルトに子ども一人分の体重がい
っぺんに襲いかかる。悲鳴をあげて反射的にズボンを押さえつ
けたが夜祥ちゃんの手はベルトに引っかかったままだった。直
前まで彼女の服のことを心配していた僕は不意のことに何を優
先すべきやらわからなくなる。

「よよよすがちやつ、見える！ 見える！」

「ああら、なんか気に入られたっぽいな、ひな坊」

「落ち着いてないで助けてくれませんかお母さん!」

慌てて懇願すると「おいおいそこは義姉おねえさんだろ？」とかわ
けのわからない文句を垂れながらなぜかしぶしぶといった物腰
で衛幸さんは夜祥ちゃんを抱きあげてくれた。本当に指が引っ

かかっていただけらしく、ほとんど抵抗なく夜祥ちゃんの体は僕から離れてくれる。ネコのように両脇に手を入れて抱えあげられた状態で、彼女はまた目を伏せて寝息を立てていた。

「あー、こりやもうしばらくダメそうだな」

「な、ナルコレプシーとかじゃないですよ、夜祥ちゃん」

「縁起でもねえことを言うなあ。ちよいと神経が太すぎるだけだよ」

そういう事なかれ主義の考え方が一番危ないんじゃないだろうかと、正直不安にならざるを得ない。僕が心配性すぎるだけならいいが。

「ま……ひ、な……」

不意に自分の名前を呼ばれた気がしてハツとした。無意識に衛幸さんを見ると、視線で合図して声の正体を教えてくれる。

宙ぶらりんのまま眠っている夜祥ちゃんの口が、かすかにだが動いていた。そういうえばまともに彼女の声を聴くのはこれが初めてだ。自己紹介のときですら口を開かなかった彼女が、寝言で僕の名前を呼んでいる。若木の幹を打つキツツキの音と似て、その声は不思議な響きを伴いずいぶんと耳に残った。

「さん、にん……ひな、ぼう、と……」

「……………」

「少年が絶句している。これはラブ入っちゃったか？」

「愕然としているんですよッ！ 呼び名！ ま、抜け！ 悪い方で覚えちゃってるじゃないですか！」

「まー銀霞に脈がねえならそういうことなのかなあ。んーひな坊なら結構アリかなあー」

「人の話を聞けェ！ 結構アリなわけないだろうがアア！」

地が出ているなどと気にしている余裕はすでない。何より夜祥ちゃんに悪い方のあだ名で呼ばれたことがショッキングだった。胃どころか心に風穴をあけられた気分だ。しかもショッキングの大きさを自覚すればするほどそれだけ夜祥ちゃんに特別な思い入れがあったような気がしてきて、あれ、本当は僕でもしかしてもしかするんじゃないかななどとあらぬ疑いを持ち始めてしまう。もはや神も仏もあるものか。

「お家の戒律が厳しいと苦労すんなあ、ひな坊」

「まを抜くな！ 何に同情してんだ！ あんたがゆるいだけだ！」

「門限の話だよ。もうあんまり時間がねえんだろ？」

こしやくな！ 話を逸らすとはこしやくな！ と憤りかけたけれど、実際衛幸さんの言うとおおり、自分で定めたタイムリミットは街灯の明かりとともにもう見える距離からにじり寄ってきていた。日の短い季節とはいえ、とつぷり暮れ終わってから商店街を出たのでは、家での晚餐にギリギリで間に合うかどうか

か。

それでもまだ逡巡してはいなかった僕に、娘をだつこの形に抱え直しながら衛幸さんは、「どうする？」と問うた。

「こっちのお姫様は、目が覚めたら引き続きお前とシヨッピンがしてえそうなの。そのぐらゐの時間はあんのかもしれんけど、お前どうするよ？」

衛幸さんはこの手のことを人に確かめる性格をしていない。尋ねるといふことは、相手に選ばせるということ。僕は彼女に選択肢を提示され、そして迫られていた。こっちのお姫様か、それとも――

「すいません」僕は選ばされた。「……他に済ませないといけない用事があるので」

それで充分だった。

衛幸さんは何も言わずに微笑む。

失礼します、と軽く頭をさげた僕に、娘を抱いた彼女は軽く手を振った。

僕はさつと踵を返し、車道を渡るために横断歩道へ向かって歩いていく。

「守雛」

ちゃんとした名前で呼ばれ、僕は立ち止まった。

振り返れば、依然として娘を抱いたまま母親らしき人物が僕

を見つめている。その表情はただしおだやかではなく、教師のように毅然としたもの。

「おれの方に落ち度が、唯一何かあるとすりゃあ、夜祥の存在をずつと伏せていたことだ」

あいつの言葉が思い出される。

自分が二人の面倒を見るのは、これまで何も知らずに生きてきたからだと言っていた。我ながらよく覚えている。

「ただ、それを普通に謝るのは、卑怯だと思ってる」

僕があなたの立場でもそうしたのでしよう。

言葉での謝罪は、あいつを追い詰めてしまっただけだから。

僕に厄介なお鉢が回ってきたのもあなたのせいだ。

恨み言はそれで精一杯。

無言で見つめ合って、それで返事が届いたのかはわからない。

間もなく背後でとおりやんせが流れ始めたから、僕は再び頭をさげて、さつさと彼らに背を向けた。

門限が近い。それまでに、あのサンタになりそこなつた小娘をつかまえなくてはならない。父母に迷惑をかけてまで他人様ひとさまの事情に首を突っ込む趣味は、僕の方にはないのだから。

to be continued...

月刊伍じうす学祭号 通卷183号

2012年 10月 22日発行

編集人 蒼井天優 64 石川裕子

発行所 広島大学文団BOX